

私のデータベース

ふじのくに地球環境史ミュージアム 佐藤洋一郎館長

若いころ、イネの原種である野生イネや各地の古い品種をさがして東南アジアを歩き回っていた私の手元には、膨大な量の種子とデータがある。種子のほうは国の機関などに預けてわが手を離れたが、データは残されたままである。いちど、一念奮起して、「野生イネデータベース」なるものを作ってみたが、その後、サーバーの故障や度重なる転勤などでお蔵入りになってしまっている。1次資料は残されているから情報そのものは失われてはいないが、しかし、わたしが死ねば、それらはやがてはゴミとして処理され、失われるに相違ない。データの中には、調査中に撮影した写真が含まれる。1999年ころまでの写真はポジフィルムで撮影したもので、コマ数は数万枚になるだろうか。その後はデジカメを使うようになったので整理は楽になったが、それ以前の写真も残したいと思って、デジタル化してパソコンに収めてある。これをある研究機関のデータベースに加えてくれるよう頼んでみたが、あっさり断られてしまった。写真に付属する、撮影場所、撮影年月日などのデータがそろっていないからだというのだ。「学術的意味がないよ」といわれたときには、はっきり言ってショックだった。

しかし、私は思う。AIが進化すれば、近い将来、その写真がどこで撮影されたものかわかるようになりはしまいか。とくに風景が写り込んだ写真は、その可能性は十分になると思うのだ。世界中で70億人の地球人が撮影した写真をアーカイブ化して記憶させてあげば、それらと照合することで写り込んだ土地がどこであるかを特定できる時代がきっと来る。さらには写り込んだ影の様子から時刻がわかり、さらには年月日もある範囲で特定できるようになるのではないかとすれば、今は付属データが不備な写真であっても、やがては補完され学術的意味を持つようになるのではないかと。

植物を写した写真も、いずれはその種名が自動的に特定され、記載される時代がきっと



2021年4月から就任した、ふじのくに地球環境史ミュージアム 佐藤洋一郎館長

来る。何しろ今は、スマホで植物の写真をぱちりと撮りさえすればその種名を瞬時に特定できるソフトのある時代なのだ。そう考えれば、何万もの写真を「学術的意味がない」といって捨ててしまうのは、あまりに惜しい気がする。

それに、である。「学術的意味」とは何だろうか。もしそれが、「学術論文になる可能性」ということであるなら、それは違うのではないかと考えている。学術論文は、研究者にとっては大事なものではあっても、研究者でない人びとにはおもしろくもなんともない文字列に過ぎない。研究機関に残すデータなのだから学術的意味を持つものだけを集めるのは当然、と考えているとすれば、それはあまりに狭小な判断というべきだ。そもそも、学術論文にならないものは価値がないという判断は、いったいどこから来るのだろうか。

とはいうものの、私のこのぼやきは、ここ当面は多くの研究者の賛同を得られそうもない。やっぱり、私の写真や記録は、いずれはゴミと化し失われてゆくのだろうか。そう考えると、何やら自分の生きてきたその証そのものが失われてゆくような気がして、内心穏やかではないのである。